



20年来グローバル コミュニケーションズ エキスパート。元JAXAエグゼクティブ アドバイザー(広報・国際担当)、国立大学法人山口大学客員教授(国際関係+コミュニケーション論)、評論家・オピニオンリーダー。東京生まれ、英国育ち。講演、テレビ、執筆、政府委員など、マルチに活躍する中で、IRと都市開発のコンサル会社代表も務める。
http://www.nishiuramidori.com

連載 第10回

“国際派大和撫子”が伝える宇宙の開発現場

にしうらみどりの

「宇宙の窓から」

イギリス宇宙局

イギリスというと、女性は薔薇やアフタヌーンティーが目に浮かぶはず。では男性は？

まず映画『007』のジェームズ・ボンドといったところでしょうか。

イギリス宇宙局 (United Kingdom Space Agency) のトップ、デイビッド・パーカー博士は07年からの男前。ロンドンでは、たつぷりとお話を伺いました。

UKSAのスタートは、2010年と聞いていましたが、それ以前の英国の宇宙開発は何十年も遡ります。戦時中は軍事目的の研究開発がなされ、戦後1962年、アリエル1号 (NASA共同) の打ち上げを遂げ、世界で3番目の衛星保有国という地位を築いたのです。

お茶とビスケットを頂きながら聞き入る筆者に、パーカー博士は

話を進めます。

「71年には英国が独自開発したロケット・ブラックアローに、これまた本国開発の人工衛星を載せて打ち上げを成功させました」「英国は、この成功により独自のロケットで人工衛星の打ち上げを成功させた世界で6番目の国になりました」

更に現UKSAに話を展開させ、「特に民間との連携は宇宙産業市場の更なる開拓、宇宙システムやサービスの応用と見込める経済効果のレベルアップ等も目指しています」

話は弾んで、「もちろん、ESA (欧州宇宙機関) の月・惑星の探査機プロジェクトなどにも参加し、大きな役割も果たしていますし、これからは日本とも様々な研究開発プロジェクトでコラボしていきたいですね」「人工衛星では観測、通信環境、航行測位分野などでも実績がありますから」と、1冊の本が書けるほど貴重なお話を伺いました。

イギリスで小型衛星といえば、SSTL社 (Surrey Satellite Technology Ltd.) を抜きにして語れません。いつか別の機会に同社な



ヒッチنز大使を囲んでホグベン科学技術担当部長 (右) と筆者 (左)、英国大使公邸にて

らではの成功例を紹介します。

東京ではティム・ヒッチنز駐日英国大使も英国の宇宙航空研究開発が齎す経済効果を称えます。

「何といっても3万人の雇用を生みました。エンジンといえばロールス・ロイス社は高い評価を世界で受けています」「宇宙に関しては、世界規模で協力する時代とはいえず、ここも英国の存在は大きいですね」と、静かな語り口の中にも大英帝国の誇りと自信が伝わってきます。

滑らかに、時折ジョークも交えながら会話が進む中、科学技術部長で一等書記官のエリザベス・ホグベン女史のさりげない補足も歓迎しながら、筆者の質問や感想も自然体で受けとめる余裕です。

ヒッチنز大使、パーカー博士両者とも群を抜いたコミュニケーター。まさに紳士の鑑、筆者がリラックスした午後でした。